

北海道社会福祉協議会

北海道中国帰国者支援・交流センター 〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目一番地かでの2・7

電話 011-252-3411 FAX011-252-3412 URL: <http://www.hokkaido-sien-center.jp/> E-mail: hokkaidocenter@dosyakyo.or.jp

交流事業・さくらんぼ狩り体験

さくらんぼを味わいつつ交流



7月10日、帰国者53名、支援者12名で砥山ふれあい果樹園にさくらんぼ狩りに出かけました。今年にはさくらんぼが不作で、お土産に持って帰ることはできませんでしたが、天候にも恵まれ、甘いさくらんぼを味わいつつ、楽しい交流のときをもつことができました。地域住民のみなさんも参加し、帰国者が自身の境遇について話したり、ともに日本の歌を歌う姿が見られました。

稚内・地域生活支援推進事業

最北端の地に育つ南国の花や果物



7月19日、稚内の帰国者のみなさんが、稚内衛生公社が運営する汚泥乾燥燃料化施設「オデッセイ」に隣接するビニールハウスを見学しました。「オデッセイ」は循環型社会のお手本となる取り組みで注目されている施設です。稚内市で1年間に焼却処分されている汚泥の内の2000トンを燃料として再利用し、その製造の過程で出るボイラー熱を活用して、隣接するビニールハウスで、北海道では育たない花や野菜、果物などを栽培しています。

帰国者のみなさんは、「このような施設があることを知れてよかった」と話し、ハイビスカスの花やパイナップル、ゴーヤ、バナナなどに興味深げに見入っていました。

今回の見学会は、稚内衛生公社の常務取締役である根本さんが、樺太帰国者の関戸ナオ子さんが教えるロシア語教室の生徒さんであることから実現しました。地域におけるひとつの結びつきが、帰国者のみなさんをさらに地域に近づけてくれました。

行って、見て、体験！「第二のふるさと」がより身近に



6月24日から25日の一泊二日で稚内日口経済交流協会の企画による「道北を知る旅」が、稚内市の協力のもとで実施されました。稚内に住む樺太帰国者と支援者、市の職員など計11名が参加しました。

富良野・美瑛・比布を巡る旅で、一日目はあいにくの雨でしたが、バスで「パッチワークの路」などの名所を巡り、その後、「富良野チーズ工房」、「ふらのワイン工場」を見学しました。二日目は天候に恵まれ、美瑛の「白ひげの滝」、「青い池」や「四季彩の丘」を散策し、比布ではいちご狩りを体験しました。景色の美しさにみなさんは感銘を受けていました。



「ずっと行ってみたかった場所にととう行けた！」

日本に帰国してから18年、ある帰国者は感慨深げにつぶやいていました。

稚内日口経済交流協会に委託している事業において、今回の旅は「郷土を知る学習会」として位置づけられています。帰国後かなりの年月が過ぎていても、さほど遠距離ではなくても、帰国者のみなさんには、まだ知らない場所がたくさんあります。実際に行って、見て、体験することで、その地域がより身近なものとなります。帰国者のみなさんの思い出に、また新たな風景が刻まれる旅となりました。



「理解とゆとりをもって」

6月24日、語りかけボランティアのみなさんのための「ボランティア研修会」が開かれました。「北海道認知症の人を支える家族の会」の西村敏子事務局長による講義を聞いた後、実際に活動されているボランティアのみなさんが活動報告をしました。

語りかけボランティアのみなさんは、帰国者が介護サービスを受ける際の不安、孤独感を解消することを目的に、話し相手になったり、事業所職員との意思疎通の補助をしています。

今回の研修会では、「認知症の人への接し方」と題された講義を聞き、認知症とはどのような病気なのか、どのような症状があるのか、また家族にとって認知症の介護とはどのようなものなのか、あるがままに受け入れるようになるまでにどのような心理的なプロセスをたどるのか、といった内容について学びました。また、ゆっくり近づいて、相手の自線に入って話しかける、普段から使っているわかりやすい言葉を使い、穏やかな口調で話すなど、具体的な接し方についても知ることができました。語りかけボランティアの場合、家族とはまた違う距離感かもしれませんが、ゆとりと理解をもって接することの大切さを学ぶことができました。



工夫し、意義を感じながら活動

続く活動報告では、5名の語りかけボランティアのみなさんが報告をしました。訪問している帰国者それぞれの状況がある中で、様々な工夫をし、充実感を得ながら活動していることが伺える内容でした。

●同じ話が繰り返される時は…

「聞くことに徹する」「話が一段落したところで、別の話題を提供する。写真や絵本、料理の本などを持って行って見せたりしている」「繰り返されるその話が、本人にとって大切な意味を持っているのではないか、と考えるようになった」

●聞こえづらいなど、会話が続かないことも

「筆談の中で本人の語彙を確認し、徐々に対話ができるようになった」「家族の話になると表情が明るくなる」「趣味の話がきっかけで話題が増えていった」

●少しずつ信頼関係が生まれ…

「玄関まで送ってくれて、ずっと手を振ってくれた」「しばらく活動を休んでいて、久しぶりに訪問したとき『しばらくね』と言ってくれた」「訪問すると、嬉しそうな顔をしてくれる」

●意義を感じながら活動している

「社会に貢献できていると感じる」「(帰国者の)高齢ながら背筋をピンとのばし、患痴などは決して言わない姿を見習わなければ、と思う」

江別市大麻で樺太帰国者の集い

江別市は、札幌からJRで約20分の隣町、その人口は約11万人、中国帰国者2家族、樺太帰国者10家族が暮らしており、大麻と呼ばれる地区からセンターに通う帰国者もいます。

その大麻で5月16日、江別市に住む樺太帰国者に呼びかけ、安心して暮らせるようにと、集まりが開かれました。呼びかけたのは樺太帰国者のみなさんを支援する江別市議会議員猪俣美香さん、そして前年度まで江別市の自立指導員を務めた塚本裕子さんです。会場の大麻集会所には11名の樺太帰国者が集まりました。この日はロシア語の支援通訳も市から派遣されました。



地域包括支援センター「困ったときには相談を」

集まりでは、大麻第一地域包括支援センターの支倉孝幸さんが、同センターの地域での役割、活動を紹介しました。介護支援のほかにも介護予防、権利擁護などに専門の職員が取り組んでいること、さらに、詐欺など消費者被害や金銭管理の相談などもできることが紹介されました。困ったことがあったら「地域包括支援センターに相談して」と支倉さんは呼びかけました。

帰国者のみなさんは、介護相談だけではなく生活相談もできることなど、ロシア語通訳のおかげもあり、地域包括支援センターについて、より理解を深めていました。市の支援通訳派遣についても、市の担当者から病院受診や必要な手続きの際に利用できると説明を受けました。また、市では今年度の自立指導員の配置も予定しています。

帰国者のみなさんからは、困ったら助けてくれるところがあると知り、「よかった」「安心できる」という声が聞かれました。集まりは、地域で暮らす帰国者のみなさんの安心を支えるときとなりました。呼びかけた猪俣さんも塚本さんも、今回の集いの手ごたえを感じていました。

～帰国者のみなさんへお知らせ～

NPO 法人シーズネットによる 介護予防のためのわくわく運動&茶サロン

手稲区前田 13:00~15:00

8月13日 9月10日 10月15日

厚別区もみじ台 10:00~12:00

8月18日 9月8日 10月27日

介護予防運動 始まります！



8月10日から毎週月曜日13:00~14:00

(「ふまねっと」がある日は13:20まで)

中国帰国者支援交流センター内の第2研修室(パソコンの部屋)で脳トレや健康体操を行います。